

# 『瀛奎律髓』 「登覽類」 について

尾形 幸子

一

『瀛奎律髓』（一二八二年成立）は元の方回（一二二七—一三〇七）が唐、宋の律詩約三千首を各詩の主題・題材等により四十九類に分類して選んだ総集である。『瀛奎律髓』は宋代の「江西詩派」の詩学の観点により編集されており、各詩には方回の評がつけられ、当時の詩の理論や分類を考える上でも興味深い一書である。本稿は『瀛奎律髓』巻頭に位置する「登覽類」をとりあげ、「登覽」という分類の意義や来源について考えてみたい。

二

そもそも、「登覽」とは何か。

『瀛奎律髓』登覽類の最初には方回自身の次のような語がある。

登高能賦、於傳識之。名山大川、絶景極目、能言者衆矣。拔其尤者、以充雋永、且以爲諸詩之冠。

高きに登りて能く賦す。伝に於て之を識す。名山大川。絶景極目、能く言う者衆し。其の尤なる者を抜き、以て

『瀛奎律髓』 「登覽類」 について

三

雋永に充て、且つ諸詩の冠と為す。

「高い所にのぼって詩を作ることができる、ということには伝に書きとめられている。名山や大きな川など、絶景を遠く見渡し、うまく表現することのできたものは多い。それらのうちでも優れたものを選んで、味わい深い名品として諸詩の冠に据えるものである。」

ここにひく「傳」とは、『詩経』鄘風「定之方中」の毛伝に、

…升高能賦、(中略)：君子能此九者、可謂有德音、可以爲大夫。

…高きに升りて能く賦し、(中略)：君子の此の九者を能くする者は德音有りと謂うべし、以て大夫と為すべし。とあるのによる。「定之方中」毛伝の正義には、

升高能賦者、謂升高有所見、能爲詩賦其形状、鋪陳其事勢也。

高きに升りて能く賦すとは、高きに升りて見る所有らば、能く詩を為り其の形状を賦し、其の事勢を鋪き陳ぶるを謂うなり。

とある。この毛伝の言葉の引用は、他の唐代以前の文献中にも多くみられる。例えば、

傳曰、不歌而誦謂之賦、登高能賦、可爲大夫。

伝に曰く、歌わずして誦す、これを賦と謂い、高きに登りて能く賦するは、大夫と為すべし。

(『漢書』藝

文志、詩賦略論)

傳云、登高能賦、可爲大夫。

伝に云えらく、高きに登りて能く賦するは、大夫と為すべし。

(『文心雕龍』詮賦)

登高能賦、親物知名、…

高きに登りては能く賦し、物を観ては名を知り、……（『三国志』魏志・武帝紀、裴松之注）  
などがその例であるが、さらに、同様な表現として、「登高必賦」という表現も見られる。例えば、次のような例がある。

孔子曰、君子登高必賦。

孔子曰く、君子は高きに登りては必ず賦す。

（『韓詩外伝』卷七）

晝則講武策、夜則思經傳、登高必賦。

昼は則ち武策を講じ、夜は則ち経伝を思い、高きに登りては必ず賦す。

（『三国志』魏志・武帝紀、裴松之

注所引、晋・王沈『魏書』）

これらのことから、「登高能賦」あるいは「登高必賦」という概念は、古代中国において広く認識されていた、君子（大夫）として必須の能力ないしは行為であったことがうかがわれる。陶淵明の次の詩句などは、明らかにこの共通の認識を踏まえるものである。

春秋多佳日 春秋 佳日多く

登高賦新詩 高きに登りて新詩を賦す （晋・陶淵明「移居」二首 其二）

「名山大川、絶景極目、能く言う者衆し。」とは高処に登って、名山や大川など、見渡すかぎりの絶景を巧みに描写する作品が多く存在することをいう。「極目」とは、目のとどろかぎりなるか遠くまで見渡すこと。『楚辞』招魂に「目極千里兮傷春心」（目は千里を極め春心を傷ましむ）とあり、また、魏の王粲「登樓賦」（『文選』卷十一所収）に「平原遠而極目兮、蔽荆山之高岑」（平原遠くして目を極むれば、荆山の高岑に蔽おほわる）とある。中国古典詩において「高処に登る」とことと「遠くまで見渡す」行為が同時に描かれることは非常に多い。例えば、

升彼虚矣 以望楚丘 彼の虚に<sup>のぼ</sup>りて 以て楚丘を望む

望楚與堂 景山與京 楚と堂と 景山と京とを望む (『詩経』 鄘風「定之方中」)

開軒臨四野 軒を開きて四野に臨み

登高望所思 高きに登りて思う所を望む (魏・阮籍「詠懷詩十七首」其十一『文選』卷二十三所収)

登高望九州 高きに登りて九州を望めば

悠悠分廣野 悠悠として広野 分かる (魏・阮籍「詠懷詩十七首」其十五『文選』卷二十三所収)

登崖遠望涕泗流 崖に登りて遠くに望めば涕泗は流る

我之懷矣心傷憂 我の懐える心は<sup>いた</sup>傷み憂う (晋・張載「擬四愁詩」『文選』卷三十所収)

高処に登って詩を作るといふ行為は、君子であることとの条件として古くから頻繁に行われていたこと、そしてそれらの詩の内容として、高処に登って遠望した素晴らしい眺望を巧みに表現したものが多く、それらの詩を「登覽」の詩としたこと、そして、「登覽」の詩が中国古典詩の代表的、伝統的存在であるために、『瀛奎律髓』四十九卷の最初に置いたということを方回は述べているのである。

本稿では、こういった、高処に登って遠くを見わたす行動を描写することを主題にした一群の詩を「登覽詩」と呼ぶことにしたい。<sup>(2)</sup>

### 三

中国古典詩集中、『瀛奎律髓』のように内容等により分類された集として、現存する最も早いものとしては『文選』が挙げられるが、『文選』には「登覽」という分類はない。「登覽」に一番近い分類としては、「遊覽」(賦は卷十一、

詩は卷二十二(一)が挙げられよう。「遊覽」に分類されている、王粲「登樓賦」、孫綽「遊天台山賦」、そして謝靈運の「登池上樓」詩や「登石門最高頂」詩、江淹「從官軍建平王登廬山香炉峰」詩にはいずれも高処に登り、そこから眺める場面描写がある。

『文選』を継ぐ意図で作られた宋・李昉等撰『文苑英華』(九八七年成立)詩部には「登覽」という分類はない。同様の意図でほぼ同じ頃に編纂された宋・姚鉉撰の『唐文粹』はやはり文体・題材・内容別分類の総集であるが、卷十六之上・古調歌篇五に「登覽」という分類で十五首の詩が集められている。その中では、李白の作品が最も多く、「望廬山瀑布」二首、「登金陵鳳凰台」、「廬山謠寄廬侍御虛舟」が採られている。

次に別集の中で分類別編集の形をとっているものを取りあげてみたい。

現在伝えられる李白の別集には文体と内容とを基準とした分類別の編集の形をとっているものが多い。<sup>(3)</sup> 静嘉堂蔵宋本『李太白文集』卷十九「登覽」には詩三十六首がある。元・楊齊賢の『分類補注李太白文集』では卷二十一に三五首が、また、清・王琦注『李太白全集』では卷二十一に三十六首が「登覽」の詩として集められている。

杜甫の内容別分類の詩集である宋刊本『分門集註杜工部詩』(四部叢刊所収)においては、「登覽」という類はなく、同様の分類として卷五の「眺望」という類に詩九首がある。(『分門集註杜工部詩』冒頭の「分門集註杜工部詩門類」では「登眺類」となっている。)「高処に登ってながめる」といった内容の詩は同じく卷五の「樓閣」や「亭榭」、卷四の「山岳」に多く収められている。

さらに、詩の分類という問題において手掛かりをあたえてくれているのが、同時代に日本で編纂された漢詩集である。日本の漢詩集の分類は、当時中国からもたらされていた詩文集や類書の影響が大きく反映されていると考えてよい。

例えば、八一八年成立の日本の勅撰漢詩集『文華秀麗集』は、

遊覧 宴集 餞別 贈答 (上巻)

詠史 述懷 艷情 樂府 梵門 哀傷 (中巻)

雜詠 (下巻)

の分類により編集されている。明らかに『文選』の詩の分類を反映しているといえよう。

さらに時代が下り、日本の天曆年間(九四七―九五七)頃成立の大江維時編の漢詩集『千載佳句』は、唐代の詩人の七言詩から二句一聯を抽出し、部類ごとに分けて編纂されたものであるが、その分類は以下のものである。

四時部 時節部 天象部 地理部 人事部 (上巻)

宮省部 居處部 草木部 禽獸部 宴喜部 遊牧部 別離部 隱逸部 釋氏部 仙道部 (下巻)

この各部はさらに細分されて合計二五八門に分類されている。この二五八門中に「登覧」という分類はないが、遊牧部中に「眺望」という分類があり、十八聯の句が集められている。

藤原公任(九六六―一〇四一)撰の『和漢朗詠集』の分類には『千載佳句』の影響があるといわれており、巻下にやはり「眺望」という分類がある。

金子彦二郎は「千載佳句の部門について、最後に述べたいことは、千載佳句の十五部門二百五十八項の小部門に就いて通覧するに、それらが著しく宮廷・官省關係の事物に偏してゐると言う特異な性格についてである。(中略)當時の文學階級が殆ど貴族や廷臣のみに限られてゐた時代であるから、それは誠に当然極まる現象であつたらうが、<sup>(4)</sup>と述べている。それと同時に、すでに多くの指摘があるように『千載佳句』や『和漢朗詠集』の分類には、中国における類書の影響が大きいことも見逃せないであらう。<sup>(5)</sup>

明の張之象撰『唐詩類苑』は、唐詩を主題別に三十九の部およびさらにその下位分類である一〇九四の類に分類した書である。「登覽」に類似した分類としては人部卷百十に、「遊覽」「眺望」「臨汎」という類がある。中島敏夫は『唐詩類苑』『古詩類苑』と代表的な類書である『藝文類聚』『淵艦類函』の四書の部立ての対照を行い、「『唐詩類苑』は『古詩類苑』と共に伝統的な類書の分類に則るものだと言える。」<sup>(6)</sup>としている。

先にあげた杜甫の内容別分類の詩集である宋刊本『分門集註杜工部詩』に「眺望」という分類があるのは、『千載佳句』や『和漢朗詠集』と同様に類書の分類の流れが反映していると考えられる。試みに『分門集註杜工部詩』の分類をあげてみれば以下のようである。

月 雨雪 雲雷 四時 節序 晝夜 夢 山嶽 江河 都邑 樓閣 眺望 亭榭 宮殿 宮詞 省宇 陵廟  
居室上 居室下 隣里 題人居室 田圃 仙道 隱逸 釋老 寺觀 皇族 世胄 宗族 外族 婚姻 園林  
果實 池沼 舟楫 橋梁 燕飲 紀行上 紀行下 述懷上 述懷下 疾病 懷古 古跡 時事上 時事下 邊塞  
將帥 軍旅 文章 書画 音樂 器用 食物 投贈 簡奇上 簡奇中 簡奇下 懷舊 尋訪 酬答 惠貺  
送別上 送別下 慶賀 傷悼 鳥 獸 虫 魚 花 草 竹 木 雜賦

最初が「月、雨雪、雲雷」など天体や氣象に関するもの、そして季節や歳時に関するもの、地理的なものと続く最初の部分のこの類目の配列順は『藝文類聚』や『初学記』など唐代に作られた類書の配列と内容的には同じであり、『分門集註杜工部詩』の分類は明らかにこれら類書の影響を受けているのである。

一方、静嘉堂蔵宋本『李太白文集』の詩は

古風 樂府 歌吟 贈 寄 別 送 酬答 遊宴 登覽 行役 懷古 閑適 懷思 感偶 寫懷 詠物 題詠  
雜詠 閨情 哀傷

という分類に分けられている。最初の「古風、樂府、歌吟」の三つはスタイルによるものである。「贈」以下「哀傷」までは詩の内容による分類であるが、『分門集註杜工部詩』のような類書分類の傾向はなく、より詩の主題に密着した分類の姿勢が感じられる。

このように見てきた結果、総集や別集における「登覽」という分類のたてかたは類書等の影響をうけたものとは異なり、宋代以降にはじまるものであると予測できよう。

#### 四

「登覽」という語は早くは『晋書』江道伝に「…登覽不以臺觀、遊豫不以苑沼。…」登覽するに台觀を以てせず、遊豫するに苑沼を以てせず。…」という使用例がある。詩における「登覽」という語の使用例を検索したところ、管見では最も早くに用いた詩人は李白である。李白の詩には「登覽」という語が三例使われている。その三例は以下の通りである。

周流試登覽 周流 登覽を試む

絶怪安可悉 絶怪 安くんぞ悉すべけんや (「登峨眉山」)

憑高遠登覽 高きに憑りて遠く登覽すれば

直下見溟渤 直下に溟渤を見る (「天台曉望」)

我来属天清 我来たりて天清に属し

登覽窮楚越 登覽し楚越を窮む (「登梅岡望金陵贈族姪高座寺僧中孚」)

以上の詩はすべて『李太白文集』では卷十九「登覽」中に入れられており、いずれも五言古詩である。



宋代以後の詩においては「登覽」という語の使用は何例かみうけられる。例えば、次のような詩句である。

北樓出林杪 北樓 林杪より出づ

登覽開病姿 登覽して病姿を開く (北宋・王禹偁「北樓感事」『小畜集』卷五)

一方、李白にしばしば対比される杜甫の詩においては「登臨」に代わって「登臨」の語が多く用いられている。杜甫においてこの語の使用は八例あり、李白にもこの語を使った五言古詩が一例ある。

醉別復幾日 醉別 復た幾日ぞ

登臨偏池臺 登臨すること 池台に偏し (李白「魯郡東石門送杜二甫」)

「登臨」という語は、

登山臨水兮送將歸 山に登り水に臨み 將に帰らんとするを送るがごとし (『楚辭』九弁)

登高臨四野 高きに登りて四野に臨み

北望青山阿 北のかた青山の阿くまを望む (魏・阮籍「詠懷詩十七首」其六『文選』卷二十三所収)

等に、類似的の表現があるのをはじめとして、

登臨情不極 登臨して情極まらざれば

蕭散趣無窮 蕭散として趣の窮まらざるはなし (陳・陰鏗「開善寺詩」)

等の用例があり詩に用いられる語として古くより用いられてきたといえよう。唐詩においても杜甫、李白以外にも目についたものだけでも、杜審言に一例、宋之問に二例、孟浩然に五例、高適に九例、岑参に三例、元結に二例、韋応物に二例、張籍に一例、劉禹錫に二例、白居易に三例、杜牧に四例、温庭筠に一例、李商隠に三例、皮日休に二例の使用が認められる。「登覽」という語が詩において使われるのは李白以前においては非常に稀であったのに対して、

「登臨」という語は唐詩においてはごく頻繁に使われていたと言えよう。

唐詩においては稀な「登覽」という語が李白詩において使われていることと、李白の別集において「登覽」という分類がたてられていることには深い関連があると考えられる。

しかし『瀛奎律髓』において、方回が、高処に登って遠くを見わたす行動を描写した詩の分類を「登覽類」としたことに特に李白詩重視の観点があつたとまでは考えられない。なぜならば、『瀛奎律髓』の編纂には宋代の「江西詩派」の詩学の影響が強く反映されているため、「江西詩派」の祖とされる杜甫の詩が圧倒的に多く、『瀛奎律髓』全体中で二百二十一首が選ばれている。これに対して、李白の詩は僅かに十二首しか選ばれていないからである。登覽類には五言律詩二十首、七言律詩二十首計四十首の詩があるが、そのうち杜甫の作品は六首、李白は三首である。この点からも李白の作品を意識して「登覽類」を立てたというよりは、おそらく方回が『瀛奎律髓』を編纂したところには既に「登覽詩」という語が一般に定着していたといえるであろう。登覽類中、杜甫の「陪章留後侍御宴南樓得風字」〔章留後侍御の宴に陪し南樓にて風の字を得たり〕詩に「老杜、登覽詩最多……」（傍線は筆者による。）という方回の評があることもこの事を裏付けていよう。

注

(1) 『四庫全書総目提要』卷一八八、集部総集類三『瀛奎律髓』には、「大旨排西崑而主江西、倡爲一祖三宗之說。一祖者、杜甫。三宗者、黃庭堅・陳師道・陳與義也。」とある。尚、『瀛奎律髓』のテキストは李慶甲集評校点『瀛奎律髓彙評』（上海古籍出版社、一九八六年四月）を用いた。

(2) 宇野直人は、これら中国詩歌における高処に登って遠くを見わたす行動の描写場面を「登高遠望」形象と名づけ、中国詩歌史上の一つの継承の系譜とみなしている。

a、宇野直人著『中国古典詩歌の手法と言語 柳永を中心として』（研文出版、一九九一年）第三章 登高詩の変遷 その一—『詩経』と『楚辞』—、第四章 登高詩の変遷 その二—「古詩一九首」から王粲まで—参照。  
これ以外に、高処に登って作られる詩を扱った先行論文としては以下のものが挙げられる。

b、「唐詩選と萬葉の長歌—登楼・登高の詩と望国の歌の構成を通して—」亀山明生（『中央大学国文』第十号、一九六六年九月）

c、「唐の登高詩起源考」松田 稔（『漢文学会々報』第二十一輯、国学院大学漢文学会、一九七五年 五月）

d、「高樓のうた—詩的イメージとしての樓 唐以前の場合—」佐藤 保（『東方学』第五十八輯 一九七九年 七月）

e、「樓上の思婦—閨怨詩のモチーフの展開—」矢嶋 美都子（『日本中国学会報』三十七集 一九八五年 十月）

cは、主に風俗としての「登高」について論ずるものである。

dは、唐代より前の詩における「樓」のイメージについて論じたものであり、ここで論じられている登るべき高処は「樓」にのみ限定される。ここで、『文選』卷二十九所収の「古詩十九首」第五首「西北有北樓、上與浮雲齊。…」詩をとりあげ、「この樓上愁思の人を、現在ぼ定説となつて見解に従い、夫をうしなつた不幸な女性と解釈」（五十七頁）し、その注に「『文選』李善注は、樓上の人を仕官して志を得ない「高才の人」とし、中国の伝統な解釈はほぼこの李善説に沿う…」（六十八頁）を指摘しているのが、筆者には興味深く感じられる。かなり大胆な仮説をたてるならば、前述のように中国の士大夫達には、「登高能賦、可爲大夫。」という概念が広く認識されていた、それ故に李善を始めとする中国の伝統な解釈は「西北有北樓、上與浮雲齊。…」詩中の樓上の人を、仕官して志を得ない「高才の人」と解釈したのではないかと考える。eは、「樓上の思婦」というひとつの型が生成されて王昌齡「閨怨」詩にいたるまでの過程を考察したものであり、a論文とともに「樓」と女性との結びつきのイメージの展開を見ることができるといえる。

(3) その理由については松浦友久によって考察がなされている。『李白研究—叙情の構造—』（三省堂、一九七六年）七三頁。

(4) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館、一九四三年）、四六九—四七〇頁。川口久

雄『平安朝日本漢文学史の研究 中篇』(一九七五年)四八五頁にも同様の指摘がある。

- (5) 川口久雄校注『和漢朗詠集』(日本古典文学体系七三、岩波書店、昭和四十年一九六五)の解説、二十一頁など。
- (6) 『唐詩類苑』研究』(『唐詩類苑』卷七下 汲古書院、一九九五年)九十二頁。